

先生の訃報に接し、あの温顔を再び仰ぐことができないのかと、哀惜の念にたえません。私は電気の出身であり、1970年代に当時やっと出てきたミニコンピュータを使ってデジタル画像処理の研究をはじめました。その医学応用の手ほどきをしてくださったのが、梅垣先生でした。先生は国手ともいえるべき偉大な医者であられましたが、工学的思考や手法を熟知しておられ、両分野を結ぶ要石になられました。ご自身で秋葉原で部品を買われて、学生時代はラジオの修理を、病院ではX線装置の修理も手がけられたとうかがってます。初期の論文には回路図が沢山のついで、電気工学の論文のようです。またコンピュータによる情報処理も、日本語での入力もままならないような初期の頃からはじめられて、文書の整理、学会名簿の作成、病歴データベースなどに活用されています。当時質量ともに情報処理の第一人者であられました。

1976年に日米セミナー"**Digital Processing of Biomedical Images**"を催した時には電子線走査によって発生する高速X線ビームによる股関節の自動診断を発表して下さいました。後の電子線走査超高速 CT のご提案につながるものです。その次に米国で催した時は **TerPogossian** の PET や **UCLA** のドナー研究所など最先端の見学をアレンジして下さいました。

先生が1978年にCTシンポジウムを始められ、それが医用画像工学会の結成につながったことはよく知られています。その会誌 **Medical Imaging Technology** の創刊号(1983)の巻頭言に、先生は「今日以後に最も重要となるのは総合画像診断という言葉が示すように、画像の収集、蓄積、編集処理等のシステム化であり、これが将来の病院設計の基本になるう」と書かれています。日本PACS研究会はそれをふまえて発足したと言ってよいと思っています。

先生は先見の明があられるとともに、合理的判断に基づいて現状を鋭く見ておられました。さきの巻頭言は「医用画像工学研究には洋々たる未来が約束されている一方では、種々の矛盾を抱えて困惑している医療の現状を打開する責任も負わされている。」と結ばれています。4半世紀を経た今でも噛み締めていかなければならないお言葉だと思っています。